

学習者と母語話者のインターアクションによる 日本語学習の可能性

——立命館アジア太平洋大学における地域交流授業の実践から——

本田明子

1. はじめに

外国語教育において、コミュニケーション能力養成の必要性が強調されるようになって久しい。日本語教育においても、そのための効果的な取り組みとして母語話者と学習者のインターアクションを取り入れた実践がさまざまに行われている。

筆者の勤務校である立命館アジア太平洋大学（以下、「APU」とする）においても、開学当初の2000年よりインターアクションを取り入れた授業を行ってきた。

本稿は、APUの日本語教育におけるインターアクション型授業の特徴を、他機関の実践との比較や、参加者（母語話者・学習者）の意識を通して分析し、この授業がもつ意義と可能性を明らかにすることを目的とする。この12年間の実践を振り返り、概観することで、学習者と母語話者のインターアクションを取り入れた日本語教育の更なる可能性を探りたい。

2. APU 日本語教育におけるインターアクション型授業の概要

2.1 APU 日本語教育におけるインターアクション型授業のはじまり

APU 日本語教育におけるインターアクション型授業は、教育理論上の効果を検討したうえで行われるようになったというよりも実地的な必要に迫られて開始されたものである。この授業が開始されたのはAPU 開学の年である2000年の12月であった。

当時、APUには1年生しか在籍しておらず、400名ほどの国際学生のほぼ全員が大学の寮であるAPハウスに住んでいるという状況であった。一方、日本語教育の到達目標は、まったく日本語学習経験のない学生に「あいうえお」から学ばせて、2年後には大学での専門講義を受講する力をつけさせるというものであった。他の大学等の高等教育機関にはこのような日本語教育プログラムは存在せず、教員にとってもゼロから始める新しい試みであった。

そのため、APUの日本語教育が始まって、教員は予想外のさまざまな問題に直面することになった。

まず、学習時間の問題である。他機関では、入学前の留学生に対し日本語教育を実施し、大学で学習できるレベルの日本語能力をつけさせてから正規生として受け入れるのが一般的であり、学生は入学前に日本語だけを集中して学ぶことができる。しかし、APUでは大学入学後、他の科目の受講と並行して日本語を学ばなければならない、日本語に集中することができない。

しかも、当時の日本語の授業数はゼロ初級の学生でも週8コマ（1コマ95分）であった。通常、初級レベルの日本語習得には300時間が標準とされているが、APUでは180時間で初級を終了するというカリキュラムになっていた。その足りない120時間分を補うものとして期待されていたのが、周囲の日本語環境である。日本で日本語を学習するのであるから、教室外で自然に日本語に接する時間が学習時間になるとの判断で、このカリキュラムの設計はなされていた。

しかし、ここでもAPUの特殊性のために、期待された日本語環境が望めないことが明らかになってきた。

APUの学生は正規生であるため、当然ながら日本語が学習の中心ではなく、他の科目を英語で受講しながら日本語を学ぶことになる。さらに、国際学生が生活するAPハウスには、国際学生しかおらず（2000年当時）、共通語は英語である。つまり、国際学生にとっては学習の場も生活の場も英語環境であり、日本語に接する機会は日本語の授業以外にはなかったのである。

また、他機関であれば、通学途上やアルバイトなどで、自然な日本語に接する機会が期待できる。しかし、日本語ができない学生にはアルバイトのチャンスもなく、交通費が高いこともあって、山の上の大学から市内に出かけて日本語に接する機会をもつこともほとんどできなかった。

さらに、日本語教員にとってもっとも予想外だったのは、日本語や日本文化への関心を持たない学生が大多数を占めていたことである。APUには、APUが日本の大学だから留学を決めたのではなく、国際大学だから留学したという学生が多い。また学習も生活も英語が中心であるため、英語圏以外の出身者が大多数を占めるAPU生にとって、第一の課題は英語である。実際、1期生のなかでは、同じ国の出身でありながら、お互いに気づかず、初対面からしばらくの間、英語で会話をしていたという例が少なからずみられた。

また、日本語環境のリソースとしてもっとも期待していた日本人学生との交流も、驚くほど少なかった。初年度の英語基準学生と日本語基準学生では、受講する講義は異なっていたうえ、開学したばかりのAPUにはサークルもなかったためである。

このような状況のなか、少しでも日本語に接する環境を作るために日本語教員はさまざまな取り組みを行うことになった。そのなかのひとつが、本稿で扱う「地域交流授業」と呼ばれるインターアクション型の授業（以下、「地域交流授業」とする）である。

2.2 地域交流授業の変遷

上述のようにAPUでの地域交流授業は始まった。この地域交流授業の目的は、学生に少しでも日本語との接点を持たせることであった。そこで、日本語母語話者である地域住民に「日本語会話練習ボランティア」として日本語の授業に協力してくれないかと呼びかけた。

この呼びかけに応じて集まった母語話者（以下、「ボランティア」とする）が参加して、学生との会話をを行うのが、地域交流授業である。

この地域交流授業は、当初、初級クラスの学生を対象に行われた。学習者が母語話者と接する機会が少なく、日本語学習への意欲が持てないという状況を解消するために始めた活動であり、初級のクラスでのニーズが高かったためである。また、当時のAPUには1年生しかいなかったため、初級以外のクラスは数クラスほどだったという実際的な理由もある。

そのうえ、教員側には、学習者と接触した経験がなくトレーニングも受けていないボランティ

アに、上級学習者との専門的な会話は難しいだろうという思い込みもあり、ボランティアとの活動は初級の学習者を中心に設定されていた。

ボランティアには、小グループでの会話練習のパートナー、学生のプレゼンテーション等の観客および審査員といった役割を果たしてくれることを期待していた。会話練習のパートナーとしては、学生の話聞いてくれること、わからない場合は身振り手振りを使ったり絵を描いたりして通じさせ、日本語で曲がりなりにも意思の疎通ができる楽しさを感じさせてほしいと依頼した。

初期のボランティアは、全員女性で、そのほとんどが子育て中の家庭の主婦であった。ところがある時期から少しずつ年配者や男性のボランティアが増え始めた。年配者は公民館主催のボランティア講座で地域交流授業を紹介されてきた講座の受講生が多く、男性は先に参加していた妻と一緒に夫婦で参加するケースが多かった。

やがて、その男性が退職し、本格的にボランティアに参加するようになり、現在では、参加者の3分の1強が男性であり、時間帯によっては男性のボランティアしかいないという状況も生まれるようになった。

ボランティアの顔ぶれの変化にもなると、地域交流実施クラスの担当教員から、「ボランティアが学生の話聞かず一方的に話しすぎる」「難しいことばを使いすぎて初級の学生とはコミュニケーションがとれない」といった声上がるようになった。

その結果、この2年ほどは初級クラスでは会話練習は実施されず、初級クラスでのボランティアの役割は書道指導、プレゼンテーションの観客・審査員に限定されるようになりつつある。その一方で、当初はまったく交流授業の行われなかった上級以上のクラス、選択科目である日本語・日本文化クラス、ビジネス日本語といったクラスでの交流授業が増え、現在はこちらが主流になっている。こうしたクラスでは、ボランティアに対して、日本語や日本文化、また企業文化を中心とする日本社会について学習者の疑問に答えてくれることを期待している。特に、一般の会社で勤務した経験が少ない日本語教員にとって、日本での就職を考える学生の、企業文化に関する切実な質問に回答してくれるボランティアは、情報のリソースとして貴重な存在となっている。

こうした退職者ボランティアは、地域だけではなく、東京、大阪、さらには海外でのビジネス経験を経て、退職して故郷に戻ってきたというケースもみられ、大企業の勤務経験者や海外の日系企業の社長経験者など、APUの学生の情報リソースとしてまたとない人材が多くみられる。

2.3 先行研究にみる他機関の実践

インターアクション型の活動は、大きく二つに分けることができる。学生が教室の外に出て、母語話者とインターアクションを行うものと、教室の中に母語話者が入るものである。前者は、コミュニティー involvement プログラムといわれ、後者はビジターセッションと呼ばれる。前者の例には、溝口（1995）が行った「日本人家庭訪問」や、山田（1996）のインタビューによるプロジェクトワークなどがある。後者には、梶原（2003）、田中（2006）、小笠（2010）、山辺・村野・向山（2009）などがあり、APUの地域交流授業もビジターセッションである。

梶原（2003）は、「留学生と日本人学生との交流促進を目的にした混成授業の実践報告」であり、

同じ大学で学ぶ留学生と日本人学生の間に自然発生的な交流がみられなかったことから、留学生と日本人学生の混成授業を行い交流の促進をはかった実践の報告となっている。

小笠（2010）のビジターも梶原（2003）同様、同じ大学内の日本人学生であるが、梶原（2003）のような継続的なインターアクション活動ではなく、留学生の口頭表現のクラスの1コマにビジターが参加するというものである。

田中（2006）は、海外での実践で、そこに在住する日本語母語話者が協力者として参加した授業を分析したもの、山辺・村野・向山（2009）は、国内の大学でのビジネス日本語クラスにビジネス経験を持つ母語話者を「シニアサポーター」として導入した授業を対象としている。

これらのビジターセッションの特徴をまとめると表のようになる。

表 先行研究にみるビジターセッションの実践例

出典	ビジターの数	ビジターの属性	対象クラス・学生	セッション回数
梶原（2003）	37名（1クラス平均7～8名）	大学生	全5クラス 89名	12週間 （混成授業は9回）
田中（2006）	24名（1回10～13名）	パリ市内・近郊在住日本語母語話者ボランティア	2グループ 全40名	1コマ90分
山辺・村野・向山（2009）	4名	ビジネス経験者（退職者）3名 現役ビジネスマン1名	2クラス 全38名	3回
小笠（2010）	5名	大学生	1クラス 15名	1コマ90分

2.4 APU 地域交流授業の特徴

それでは、このような実践例と比較して、APUの実践例にはどのような特徴があるだろうか。

前述のように、地域交流授業は、2000年12月、13名のボランティアの参加で始まった。この13名は、別府市内の公民館主催の母親教室、ボランティア教室の参加者で、「APUの留学生の日本語会話練習の相手をするボランティア活動」に協力を申し出てくれた方々だった。

この最初の地域交流授業には2クラス30名程度の初級の学生が参加した。この学生たちは入学後2ヶ月経過していたにもかかわらず、このときの授業で初めて教職員以外の日本語母語話者と話したというものが半数以上だった。

その後、さまざまな機会を作って協力を呼びかけるなどし、2011年12月までの12年間に1度でもボランティアとして参加した人は500名を超える。そのなかで現在も継続して参加する意志があると思われる2010年・2011年の2年間の地域交流授業に参加したボランティアは375名となる。なかには、2000年、2001年から10年以上ボランティアを続けている参加者もいる。

地域交流授業は、その学期に開講する日本語クラス（2011年秋 semester は全55クラス）のうち、ボランティアとのセッションを希望するクラスの担当教員が、希望の日時をコーディネーター（筆者）に伝え、コーディネーターが全ボランティアに案内を送り、ボランティアは都合のつく日時に参加するというやり方をとっている。2011年度は、62クラスが参加した（1クラスの学生数は最大25名）。

このように、APUの地域交流授業の最大の特徴は、関わる人数の多さである。ボランティアのうち、実際に授業に参加するビジターは1年間に300名近く、学生は1000名を越える。また、担当の教員数も30名近い。

そして、1学期（4か月）間に平均して30クラス程度の参加があり、1回の実施日に3クラスずつ行うとしても、10日程度の実施が必要となる。このすべての回に参加を求めることは、参加するボランティアにとっては負担が大きいため、ボランティアの人数を増やし、1人当たりの負担を減らすことが必要となる。そこで、広くさまざまなところで協力を呼びかけ、友人・知人大歓迎、事前の参加申し込み不要、当日都合がつけば来てください、といったやり方をとっている。そのため、授業の担当教員は当日まで、何名のボランティアの参加があるのか、どのようなボランティアが来るのか予測がつかないなかで、授業の内容を考えなければならないという状況にある。

したがって、明確な目標に向かってデザインされ、準備が行われている前述の先行研究にあるようなビジターセッションとAPUの地域交流授業とは、やや性質の異なるものになっている。

次の章では、このような特徴を有する地域交流授業において、ビジター、学生、教員の3者はどのような期待をもって実践に取り組んでいるのか、教室の中でどのようなインターアクションが成立しているのかを分析する。

3. 地域交流授業におけるインターアクションについての考察

3.1 研究の方法

この章では、ボランティアおよび学生へのアンケートを用いた意識調査、インタビュー、授業実施後のボランティアのコメント、授業実施者としての筆者の観察に基づく内省を資料として教室内でどのようなインターアクションが行われているか分析を行う。

3.2 ボランティアの意識

地域交流に参加するボランティアはどのような意識をもって参加しているのだろうか。

2010年3月に行ったボランティアへのアンケートから、その意識を探ってみたい。このアンケートは、1度でも地域交流授業に参加した経験のあるボランティア342名に対して、調査紙を郵送し、回答を依頼したものである。回答者は188名で、回収率は約55%であった。

ボランティアへのアンケートの回答から

①このボランティアの活動をどのようにして知ったか

友人・知人に紹介された	113人
公民館等の主催する講座に参加して紹介された	12人
APU関係者から聞いた	10人
APUのオフィス等に問い合わせた	0人
その他	10人

②ボランティアに参加した理由

- | | |
|--------------------|-----|
| ボランティアに興味があったから | 40人 |
| 留学生（外国人）と交流したかったから | 96人 |
| APUに興味があったから | 19人 |
| 友人・知人に誘われたから | 28人 |
| その他 | 5人 |
- ③継続してボランティアに参加している理由（継続して参加している162人のみ回答）
- | | |
|--------------------------|-----|
| 留学生の役に立ちたいから | 92人 |
| 海外の話が聞けるから | 16人 |
| 若い世代の学生と話せるから | 22人 |
| APUに行くのが楽しいから | 13人 |
| 一緒に行く友達がいるから | 13人 |
| 連絡をもらうので行かないと悪いような気がするから | 1人 |
| その他 | 5人 |
- ④ボランティアに参加していない理由（参加をやめた26人のみ回答）
- | | |
|---------------------|-----|
| 留学生の役に立つかわからないから | 2人 |
| 会話の内容がつまらないから | 0人 |
| 留学生の日本語がわからなくて疲れるから | 0人 |
| 忙しくて時間がないから | 23人 |
| 参加した時に不愉快なことがあったから | 1人 |
| その他 | 0人 |
- ⑤地域交流授業で会った学生と授業以外のところで会ったことがあるか
- | | |
|----|------|
| ある | 50人 |
| ない | 138人 |
- ⑥「ある」場合、どんなところで会ったのか
- ・お正月に自宅に遊びに来ました。
 - ・家庭に遊びに来たので、お祭りやひなめぐりに連れて行った。
 - ・会ったことはないですが、メールでのやり取りのみです。
 - ・アルバイト先で見かけ、励ましの言葉をかけました。
 - ・2度目のボランティアでAPUに行った時。一回目で行った授業で会話をした学生が覚えていてくれて廊下で声をかけられた。
- ⑦地域交流授業に参加してみてよかったことは
- ・日本語を正しく話す為には再度日本語を勉強をしました。日本の若い世代と外国人の若い世代の相違を感じたこと。
 - ・仕事上ですが、日本語が分からない留学生の方が買い物にこられても言葉の壁があっても外国の方々と接する機会を持たせお陰で抵抗なく声をかける事が出来るようになりました。日本に来たことを後悔しない学生生活を送って欲しいです。
 - ・出身国の紹介など聞かせて頂いてとても楽しく勉強させてもらいました。
 - ・留学生の素晴らしさ、一生懸命さを知ることが出来た。外国の自然、文化、生活の様子

などを知ることが出来た。若い学生さんたちとふれ合う事で大変刺激になり自分の学習意欲を向上させる事が出来た。

- ・自分の娘を思い出し、がんばっている姿に感動しました。他国の人のお話が聞けて勉強になりました。自分自身に若いエネルギーをもらいます。
- ・外国人コンプレックスがなくなった。（海外旅行をして）
- ・自分が日本人だという当たり前のことを意識するようになった。子供の進学先を考えるきっかけになった。
- ・遠い外国に来て学習する意欲に感心した
- ・毎回新しい発見、感動、いろいろありますが、個人的には初めての韓国（ソウル）観光で韓国人の学生さんがアドバイスをしてくれたことです。とても助かりました。

このアンケートの結果をみると、ボランティアは「友人・知人に誘われて」「留学生と交流したい」ので参加し、「留学生の役に立ちたい」と思って継続して参加している人が多いようだ。参加のきっかけは「誘われて」という比較的受動的なもので、「ボランティア」という意識もあまりないようだが、参加しているうちに学生の役に立ちたいという思いが強くなってくるようである。

参加してみてよかったこととして、「がんばっている姿に感動した」といったコメントがあるのをみても、はじめは軽い気持ちで参加しても、学生と接するうちに彼らを応援したいという気持ちになってくるのだということがわかる。

こうしたある意味で軽い気持ちで参加するボランティアが多いということも、地域交流授業の特徴であるかもしれない。

ボランティアの側からみれば、参加のために登録が必要なわけでもなく、案内状を見て都合のいい日に行けばいいため、気軽に参加できる反面、ボランティアとしての責任を果たすといった意識はうまれにくいのだろう。実施する教員の側も、当日になるまでどんな人が何人くらい来るのかわからないので、綿密な準備のうえで行うというよりも、予想外の状況にも対応できるような柔軟な授業設計をせざるを得ない。

こうした理由で、地域交流授業は教員の示した授業プランに従って進むというより、参加者（ボランティアと学生）が自由に行うインターアクションという性格が強い。

そのため、教員が最初にその日のタスクを提示しても、ボランティアがいきなり地図を取りだし、自分が訪ねたことのある国の説明を始める、といったこともしばしば起きてしまう。結局は、ボランティアと学生が自由に話すだけで終わってしまったり、ボランティアが一方的に自分の話をするだけで終わってしまったりするということも多い。教員としては、このような授業について、果たして日本語教育としてどのような意義があるのか、疑問を感じたこともあった（本田 2003）。

一方で、そのような自由度があるために、ボランティアと学習者との関係が、交流授業の範囲内にとどまらず、学外での活動にも発展していくことがある。アンケートによれば、回答者の約27%が、授業外で学習者とのかわりをもった経験があった。偶然に会ったというものもあるが、家庭に招いたり、買い物やイベントに連れて行ったりといった関わりをもち、継続的

な関係に発展している例もある。地域交流授業で出会った学生と卒業まで交友を続けたボランティアが、学生に招かれて卒業式に出席している姿を見ることも多い。さらに卒業後、帰国した学生とEメールやfacebookを通じて交流を続けているボランティアもいる。

このようにボランティアと学生との関係が教室を離れて広がっていくことは、学生に日本語環境を与えたいという当初の目的を考えれば、望ましい方向だといえるだろう。

また、自由度の高い授業であるため、ボランティアのほうから、教員に対する働きかけや授業への提案が行われることもある。これまでに書道体験や浴衣の着付け体験などがボランティアからの提案によって実施された。

このようにボランティアが、自律的に行動するという点も地域交流授業の特徴であり、ボランティアが積極的に知人を誘ったり、新聞等に投稿したりしてこの活動が広がっている。そのうえ、ボランティアを通してほかの交流活動ともつながりができ、公民館主催の交流講座に留学生を講師として定期的に派遣するなど、教員とボランティアの関係にも教室の中にとどまらない広がりが生まれている。

3.3 学生（学習者）の意識

それでは、この活動について、学習者はどのように感じているのだろうか、2005年に行った意識調査の結果がある。この調査では、地域交流授業と、学内の英語クラス（英語を学習する、日本人学生を中心としたクラス）との交流授業を比較してたずねた。

学生のアンケート結果（2005年実施 初級学生対象）

①地域ボランティアと英語クラスとの交流、どちらが役に立つか

APUの学生のほうが役に立つ	28人 (28.9%)
地域ボランティアのほうが役に立つ	27人 (27.8%)
どちらもいえない	5人 (5.2%)
どちらも同じくらい役に立つ	35人 (36.1%)
どちらも役に立たない	0人 (0.0%)
未回答	2人 (2.1%)

②その理由

APUの学生のほうが役に立つ

- ・同じ年代だから、話題が共通
- ・キャンパスで会える
- ・英語が話せるからコミュニケーションができる

地域ボランティアのほうが役に立つ

- ・会話の主導権をとってくれる（話がとぎれないように質問してくれる）
- ・英語が話せないから、日本語を使わなければならない
- ・敬語など、キャンパスでは使わない日本語の練習ができる

どちらも同じくらい役に立つ

- ・どちらもネイティブだから

- ・それぞれにいい点がある

このように地域交流授業と英語クラスとの交流授業とを比較した質問の回答をみると、学習者は、ボランティア、日本人学生どちらの母語話者とのインターアクションも、「役に立つ」経験として認識しているようである。その理由をみると、ボランティアとの活動のほうが役に立つという学生は、「相手が英語を話さないで、日本語を話さなければならない」とか、「ふだん使わない敬語などの練習ができる」と、日本語学習の機会として「役に立つ」と考えているようであるのに対して、英語クラスの日本人学生との交流のほうが役に立つという学生は、「同じ年代で話題が共通」とか「英語でコミュニケーションができる」等、日本語の学習としてより、コミュニケーションができる母語話者との交流活動としての役割を重視しているようにみられる。

同様の意識調査は、2007年にも行ったが、2005年の調査と同じような傾向がみられた。このときは少数ながら中級の学習者も活動に参加していたが、中級学習者は、日本人学生との交流より地域ボランティアのほうが役に立つという回答がわずかに多くみられる。その理由も「日本語の学習機会」として役に立つというものであった。

ここには、2言語教育を行うAPUならではの特徴もみられる。留学生にとって学内の日本人学生が日本語学習のリソースになるのと同様に、日本人学生にとっては、留学生は英語学習のリソースとなる。したがって、日本人学生との対話では、日本語でコミュニケーションできなければ英語にスイッチすればいいという気安さがあり、必ずしも日本語使用を促進するリソースとはならない。また、英語クラスとの交流は、1コマの中で、英語での交流授業と日本語での交流授業を半々ずつ行うという点も地域交流授業との違いとなっている。学生は、日本語での交流の時間は言語的に不利な状況にあるが、英語での交流の時間は逆に有利な立場になる。そのため、留学生と日本人学生とは対等な関係を築くことができる。

それに対して、地域交流授業では、地域在住で比較的高い年齢層のボランティアが相手であり、英語を使うことができないため「日本語でコミュニケーションしなければならない相手」である。このため、学生は英語クラスの日本人学生との交流は「コミュニケーションを楽しむ機会」であり、地域交流授業は「日本語を学習する場」であるといった意識をもつのだと思われる。実際に、APUの多国籍環境の中では、どうしても「日本語を使わなければならない」という場面はそれほど多くはない。そのようななかで、地域交流授業におけるボランティアの存在は、学生に日本語使用を強く促すしかけとして有効なものとなる。

これまでの先行研究では、ビジターセッションにおけるビジターの役割として以下の1～3が指摘されているが、APUではその3つに加えて、4の役割が期待されているといえるだろう。

地域交流授業において、ボランティア（ビジター）に期待される役割

- 1 学習者の会話パートナー
- 2 学習者の発表・ロールプレイ等の観客・審査員
- 3 日本文化・社会に関する情報のリソース
- 4 日本語使用の強制力

このように地域交流授業では、教室という枠の中にありながら、必ずしもそれにとらわれて

いないボランティアの主導によって、結果的に学生は自然に近い日本語環境に置かれることになっているといえるかもしれない。

しかし、地域交流授業のような学習者と母語話者のインターアクションを取り入れた授業が、どこまで自然な日本語環境に近づけるかには、実は授業を担当する教員の意識が大きく影響するのではないだろうか。APUの地域交流授業の場合、初期のころ、とにかく学生を日本語に触れさせることを目的としていたときには、教員は学生を母語話者の日本語のシャワーの中に飛び込ませるような意識を持っていた。その後、次第に地域交流授業が習慣化してくるにつれ、教員の中には、ボランティアに対し、「学習者のわかりやすい日本語を使ってほしい」とか「学生の話聞いてほしい」といった不満が生じ始めている。

教員のこうした意識が強まると、母語話者の日本語をコントロールしようとしたり、学生のわかりやすい日本語を使えないボランティアを敬遠したりするようになる。その結果、母語話者との自然なインターアクションをとり入れるための授業ではなく、教員によってコントロールされた「学習者にやさしい」日本語の授業に変わっていくかもしれない。

4. おわりに

以上のように学習者が日本語に触れる機会を増やす目的で始まったAPUの地域交流授業は、他機関での実践に比較し、関わる人数が多く、日本語習得のための明確な目的のもとに実践することが難しいという特徴がある。また、ボランティアには自分の役割を意識しないまま気軽に参加する傾向がみられる。このため、教員がボランティアをコントロールできず、特に初級のクラスでは、ボランティア主導の自由会話になりがちだという点が問題視され、実施した教員から、「ボランティアが一方向的に自分の話ばかりする」あるいは、「ボランティアは使用する日本語をコントロールできず学習者には理解できない難しいことばを使う」といった点が問題として指摘されている。

だが、この地域交流授業は、学習者にとっては、疑似的な日本語使用場面ではなく、本物の日本語使用場面となりうるものである。さらに、教室の外での交流につながるなど、さまざまな可能性を秘めている。

トムソン(2007)に「壁のない教室」というコンセプトが紹介されている。これは、「教室と地域社会の物理的な距離を越えると言う意味だけではなく、学習者と教室と言う呪縛から解放し、学習者と日本語話者の壁を打ち破り、さらに学習者と教師の壁を崩すことをも意味している」ものだ(トムソン2007, p.19)。地域交流授業は教室から地域へという広がりをもつという点で、この「壁のない教室」の実現につながるものではないかと思う。

現在、APUの中級のクラスでは、地域交流授業をさらに発展させた「活動」に取り組んでいる。これはコミュニティ involvement プログラムの1種で、この「活動」のために学生は必ず地域の母語話者にインタビューを行うことになっている。インタビュー前にはボランティアとの会話で事前調査を行ってから、大学の外へ出てインタビューを行い、インタビュー結果をまとめてボランティアに聞いてもらうという流れになっている。このように、ビジターセッションとコミュニティ involvement プログラムとを組み合わせることで、教室と地域の相互交流が

生まれ、「壁のない教室」へと発展することをめざしている。

地域交流授業のようなインターアクション型の授業においては、母語話者と学習者のインターアクションに焦点があてられるが、APUの地域交流授業の実践から明らかになったのは、このような授業における教員の意識の重要性である。学習者と母語話者の壁だけではなく、教員自身がとらわれている従来の教室学習の壁を打ち崩すことができるかどうか、実はインターアクション型授業の成否に大きな影響を持っているのではないだろうか。

今後は、学習者、母語話者、教員という3者のインターアクションを研究の対象とし、3者の相互交流によるそれぞれの学びの可能性を探っていきたい。

参考文献

- 小笠恵美子（2010）。「ビジターセッションで参加者双方は何を得るか—留学生と日本人学生によるスピーチ作成に向けた会話の分析—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』2, pp. 32-40
- 梶原綾乃（2003）「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117, pp. 93-102
- 田中綾乃（2006）「ビジターセッションで留学生と日本人協力者は本当に「話せた」か」『WEB版日本語教育実践フォーラム』
- トムソン木下千尋（2007）「地域社会（Communities）に広がる学習共同体—オーストラリアの大学の日本語教育の場合」『日本語教育』133, pp. 15-21
- 本田明子（2003）「地域社会との交流による日本語会話練習—多文化共生の時代に日本語教員としてできること—」『ことば』24 現代日本語研究会, pp. 118-127
- 溝口博幸（1995）「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育—「日本人家庭訪問」の場合—」『日本語教育』87, pp.114-125
- 山田泉（1996）『社会派日本語教育のすすめ 異文化適応教育と日本語教育2』凡人社
- 山辺真理子・村野節子・向山陽子（2009）「ビジネス日本語教育へのシニアサポーター導入の試み」2009年度日本語教育学会春季大会予稿集, pp.145-150

